ナース・コール

副代表 谷川 勝男

令和元年九月二十四日、心臓の手術をしていただいた。そして十月三十一日に退院。

道立北見病院三階、心臓外科病棟での三十七日間、人工弁に換えていただいた手術後の身をベッドにあずけて、なんとなく過ごした。

三十七日間、本を一行も読むこともなく、「ただ、なんとなく」であったというのは初めてのこと、しかし、退屈だったわけでもない。

朝、看護師さんが「今日、担当させていただく○○です」と自己紹介して下さる。

夕方、「これからあと、夜の担当の○○です」との引き継ぎが、直接、患者に知らされる。

そして、プリントアウトされた患者個人宛の「看護目標」には、二十項目ほどの看護師としての為すべきことが記されている。

さらにナース・コール。患者のどんな求めにも対応して下さる。

看護師さんたちだけでない。薬剤師、栄養士、検査技師やリハビリ担当の皆さんが必要に応じて動いて下さる。

そして院長先生や担当の先生もこまめに病室を回って声をかけて下さる。

そんな三階の心臓外科病棟は、しかし、とても静かだ。

とくに看護師さんたち。

スタッフステーションで輪になっていたり、三、四人が向き合って打ち合わせ、引き継ぎらしきことをされている様子を目にすることはある。が、やはり、何も聞こえてこない。

男性看護師がひとりおられるが、どんな異和感もなく看護師としての仕事をされている。

年令、経験、人柄などそれぞれであるはずの看護師さんたちが、低きに流れる水のような自然さで、一体となって、仕事をされている。

ベテランのおひとりが、美和さんだった。

出会ったのは美和さんが中学生になったとき、一年間だけ担任だった。二年になるときの学級編成で別になった。

そして今、高齢者として「高齢化」していくときの病床でお世話になることができた。うれしかった。

ナース・コール。

ベッドに引かれたコードのボタンを押すだけ、何秒、くらいの速さで看護師さんが、静かに、登場して下さる。

その速さ、一体感、患者に向き合っては「病棟」が大きなひとつの「神の手」のようにして動かれて、どんな齟齬も来さない。看護師さんたちの心と意志とがこまやかにかみあっているのだろうと思われた。

東日本大震災は二〇一一年三月一一日のことだった。

その震災・津波で石巻市立大川小学校の児童七十四人と教職員十人が亡くなられた。

教職員の「故意」による「殺人」といいたくらいの悲劇であった、というのがぼくの受け止め方だが（『谷川流 教師の本懐』の「千年後にも伝えたい過ち大川小学校の消された五十一分」）今も納得がいかない。

ところが、やっと、この十月十日、最高裁が石巻市と宮城県の上告を退けて、市と県とに十四億三千万円の賠償を命じた。

それでもしかし、そのとき現場にいて、一人生存している教師には「証言」させないままなのである。

十一人の教師たちが「現場」でどんな判断・やりとりで七十四人を死なせてしまったのかが「分かる」唯一の「証言」をさせないままでの「十月十日」の決定なのであった。

奇奇怪怪というしかないが、そんなにも行政や教育界の「人間の劣化」がひどくて凄いということなのであろう。

人間の劣化――とはいやな言葉だ。しかし、そんなことが増える一方だ。

比べることで「事の本当」がより鮮明になることは少くない。

大川小、石巻市教委の「無能」振りは「殺人罪」に匹敵するほどのものと思うが、比べて、道立北見病院の看護師さんたちが患者に向き合うときの誠実さ、真剣さは「劣化」とは「真逆」のもの、そのことに尽きる。

十一月二十八日に上京して、三十日、北鎌倉駅で末娘楓子夫妻、次男玄二兄と待ち合わせて鎌倉の紅葉、お汁粉に舌つづみを打った。

夜は浜松町に戻っての「宴」、十時間、歩いて、食べて、飲んでのおしゃべりに耐えられるまでに、わが「肉体」は復調、前途洋洋の「老春」を目指したい。

編集後記

ブラック・ジャックセミナー2019は事故もなく無事に終了し、その記念写真を参加中学生や共催各社の皆さんへ配布後、12月初旬から本号の編集に取りかかり、漸く脱稿することが出来てほっとしている処です。

参加した生徒にお願いした作文の締め切り日が過ぎ、会の事務局長の基にその作品が届き続けています。作文の到着順にその編集が進んでいます。

令和元年もあと少しの日々で暮れようとしています。

会も令和の時代にふさわしい新たなる戦略を構想しなければと思案中です。

何かと気ぜわしい師走です。

読者の皆さん、お身体をご自愛戴き、新しい良い歳をお迎え下さい。

（逢坂）